

『京都・インクライン物語』……写真は蹴上船溜、左のトンネルから出てくるのが、第二疏水。



## I 頭の体操

さて、少し、頭の体操です。下記の3組の町・市の組み合わせで共通する事柄は何でしょうか。

- ①福島県耶麻郡猪苗代町⇔会津若松市
- ②神奈川県足柄下郡箱根町⇔静岡県裾野市
- ③滋賀県大津市⇔京都府京都市

これだけのヒントで正解を言える方は、相当に「人文地理お宅」でしょう。正解は。

答え: 全て、「用水(疎水)」で共通しております。

- ①猪苗代町にある猪苗代湖の水が、戸ノ口用水堰を経て、会津若松市に供給しております。白虎隊で有名な飯盛山、「さざえ堂」の傍で、トンネルから水が噴き出しているのが戸ノ口用水です。
- ②箱根町にある芦ノ湖の水を、箱根山の西側に広がる農業用水の不足していた御殿場市・裾野市・長泉町等へ引いたものです。深良用水(箱根用水)と言われ、江戸時代の比較的、初期、

1666年～1670年に、箱根山の外輪山にトンネルで開削されました。それから、各種の裁判の結果、芦ノ湖の水利権は、用水開削に関わった静岡県側にあることとなりました。開削以来芦ノ湖から流れ出る水の水門は、早川へ流れ出る湖尻水門と、箱根用水に流れ出る深良水門の二つあることとなります。

③琵琶湖の水を京都市に持ってこようとする用水路(琵琶湖疎水)。第一疎水と第二疎水があり、明治18年(1885)起工、明治23年(1890)第一疎水完成。明治45年第二疎水・蹴上浄水場完成。

以来、125年にわたり琵琶湖の水は、京都に流れ続けています。本稿においては、少しこの琵琶湖疎水の有用性について話してみたい。

## II 琵琶湖疎水の目的

京都も、平安京以来千年の間、我が国の首都として栄えてきましたが、明治2年の東京遷都以来、産業も急激に衰退し、人口も急減していきました。

この京都の復興のために、下記の複数の目的をもって琵琶湖疎水は開削されました。

### 1. 舟運のために。

江戸時代から、明治の初期まで北前船により、北海道から運ばれた物資は、北海道・松前⇒敦賀から琵琶湖北部まで、陸路を辿り、そこから物資を船に積み替えて、舟運により、琵琶湖南部の大津に至り、又、積み替えて、陸路を京都まで運びました。しかし、そのころの陸路は、人力・馬車・牛車等の誠に非効率的な運送方法でありました。

従って、琵琶湖から乗り換えなしで、直接、船(三十石船程度……4.5トン程度。現代のボート程度の船ではあるが)により京都に運べれば格段に効率的な運送方法となる。

しかし、琵琶湖の湖面のレベルと、京都の地面のレベルとは、格段の高低さがあり、琵琶湖から京都へ直接的な水路建設は、流れが急流になり過ぎるため出来ません。従って、琵琶湖の大津から取り入れられた水は、京都・山科区の北側の山裾を緩やかな傾斜の流れで、幾つかのトンネルを出入りしながら、南禅寺の南側の小高い大日山中腹の「蹴上船溜」に貯水され、ここから物資を運んできた船は、東山の懸崖に造られた四条のレールを光らせるインクラインにより、京都の地面とほぼ同レベルの「南禅寺船溜」まで、延長582メートル、勾配十五の一の傾斜をつけた傾斜鉄道(インクライン)で運ばれました。

「船が山にのぼる！」棹もささずにインクラインを上下する三十石船に人々は目を見張りました。

この運転は、後述する水力発電の電力によりました。

ただ、道路とトラック等の輸送手段の格段の向上により、現在ではこの琵琶湖疏水は、舟運目的では使用されておりません。

## 2.飲料水（水道用水）として

古来より、京都は地下水を保持する岩盤が比較的浅いところです。従いまして地下水の水位は低く、井戸は浅いものでした。そのため、京都においては、その浅い井戸を通じて病気の蔓延が猖獗しておりました。

琵琶湖疏水の重要な目的の一つが、琵琶湖の水を京都の上水道の水源とすることでした。第二疏水の水も合流して、明治45年4月に蹴上浄水場が給水を開始し、その水道は、現在までも京都市民の重要なものとして利用されており、蹴上浄水場も現存し、一日の最大給水量は、95万1千立方メートルとして稼働しております。

## 3.日本最初の水力発電

疏水工事の最中に、米国で水力発電なるものが発明された事を、聞いて、主任技師・田邊朔郎（工部大学校・現東京大学工学部卒）を米国に派遣し、その技術により、日本初の水力発電を行ないました。また、この電力を利用して、日本初の路面電車を開通させました。

余談ですが、この市電が時代の流れにより廃止されたのち、その線路敷きに敷いてあった敷石を利用したのが、疏水分線（蹴上船溜⇒南禅寺水路閣⇒若王子⇒高野⇒下賀茂）……沿いの道（いわゆる「哲学の小道」）の敷石です。

この水力発電は疏水起工時の諸目的の外に、主として工業動力に振り向けられ、紡績、伸銅、機械、タバコ等の新しい産業の振興に絶大なる能力を発揮し京都市発展の一大原動力となりました。

## 4.農業用水・水車の動力源として

上記の疏水分線（蹴上船溜⇒南禅寺水路閣⇒若王子⇒高野⇒下賀茂）を利用して、吉田山の北側付近の白河の農業用水として利用していました。

また、この疏水の水を利用して水車を回して、これを動力源として用いていました。

## 5.こぼれ話

### (1) 南から北へ流れる川

京都の町は、北から南にはっきりと傾斜しております。ちなみに京都一条の地面と、九条の東寺の五重塔のてっぺんとが、同じレベルですから、如何に傾斜が急であるかはお分かり頂けるとと思います。従って、京都の川は、なべて北から南に向かって流れております。

しかし、上記の疏水分線（蹴上船溜⇒南禅寺水路閣⇒若王子⇒高野⇒下賀茂）は、人工的に傾斜をつけて大文字（如意岳）の山麓に沿って南から北へ、その後、西へと流れております。

「哲学の小径」……「若王子～銀閣寺道」は、哲学者西田幾太郎先生や、文化人にこよなく愛され、多くの市民や観光客に親しまれていますが、この哲学の小径沿いの流れが疏水分線であり、南から北へと流れている京都では稀な水路であることを知っておられましたか。

### (2) 京都には船頭が多い

諺に「船頭多くして船山にのぼる」と言います。これは、一艘の船に何人もの船頭がいたら、指図する人ばかりが増えて物事が見当違いの方向に進むことを言うそうです。

琵琶湖疏水が完成し、前述のインクラインで船が山を登り下りする様は、まさに京都には、船頭が多いから、船が山に登るよ、と言われます。そんなに京都には、理屈を捏ねる人が多いですかね～。

### (3) 何をするにも反対者が必ずいますね。

疏水分線は、蹴上の船溜を出て北上し、すぐに南禅寺の境内を北上します。南禅寺境内には当時としては赤レンガの画期的な異国風建造物の水路閣を設けました。今では、歴史的な風土に溶け込んだ景観となっております。「南禅寺水路閣」と言い、平成 8 年には、インクラインとともに国の史跡に指定されております。

ただし、この水路閣を建設していた当時、新聞紙面で、大々的な建設反対論を唱えた方がおられます。

曰く、「南禅寺の境内のような歴史的な風土に、ケバケバしい赤レンガで拵えた用水路を通すことはけしからん」。この異論を述べた方は、福沢諭吉先生です。

筆者は思いました。どんなことをするにも、必ず反対する人はいるものだ。

以上